

## 施設環境づくり支援プログラムの継続と向上のための 理論モデルの実践への適用

—施設環境づくりグッドプラクティス事例を通じた検討—

児 玉 桂 子 ・ 廣 瀬 圭 子 ・ 鈴 木 真智子  
古 賀 誉 章 ・ 大 島 千 帆 ・ 沼 田 恭 子

### Applying “a theoretical model to sustain and improve a program on creation of institutional environments” into practice: consideration of the effect of good practice examples on the creation of institutional environments

Keiko Kodama ・ Keiko Hirose ・ Machiko Suzuki  
Takaaki Koga ・ Chiho Oshima ・ Kyoko Numata

**Abstract:** We examined good practice (GP) examples of “a theoretical model to sustain and improve a program on creation of institutional environments” to determine its usefulness. Our findings revealed that 1) elements of the program on the effective creation of institutional environments were soundly put into practice; 2) institutional environments that will maintain lifestyle and independence of elderly persons with dementia were created; 3) the creation of institutional environments led to improvements in the institutional environments and the behavior of elderly persons with dementia; and 4) the mechanism of creating institutional environments, which was based on self-evaluation of the staff at institutions where the program was implemented as well as evaluation by peers from other institutions, was demonstrated to be useful for sustaining and improving the program on the creation of institutional environments.

**Key Words:** Elderly persons with dementia, Program on creation of institutional environments, PEAP, Application of a theoretical model, Good practice examples

**要旨:**「施設環境づくり支援プログラムの継続と向上のための理論モデル」を適用した施設の中から、グッドプラクティス事例（GP）の4年間の実践を取り上げ、この理論モデルの有用性について明らかにした。1）施設環境づくりに効果的なプログラム要素が、着実に実施された。2）認知症高齢者のライフスタイルや自立を維持する環境づくりが実施された。3）施設環境づくりによる「サービス成果」として、認知症高齢者にふさわしい施設環境へと大きく改善した。4）施設環境づくりによる「利用者成果」として、認知症高齢者の社会活動や自律的生活が向上した。5）実践施設の職員による自己評価と他施設職員によるピア評価に基づく施設環境づくりの仕組みが、施設環境づくり支援プログラムの継続と向上に有用であることが示唆された。

**キーワード:** 認知症高齢者、施設環境づくり支援プログラム、PEAP、理論モデルの適用、グッドプラクティス事例

## I. 研究の背景と目的

### 1. 研究の背景

人を取り巻く生活環境は暮らしに大きな影響を及ぼし、同時に私たちは生活環境に働きかけ、各自に適した状態に調整して、環境を活用している。心身機能が低下した認知症高齢者は、通常の環境のもとでは混乱に陥ることがあるが、認知症高齢者に配慮された環境は、その人のライフスタイル、自立、尊厳の維持に大きく寄与することが明らかにされている<sup>1,2)</sup>。

このような認知症高齢者への環境理論に基づき、環境の視点を取り入れたケアの実践により認知症ケアや生活の質向上を目指した「認知症高齢者に配慮した施設環境づくり支援プログラム（以下「施設環境づくり支援プログラム」と省略）」が開発された<sup>3)</sup>。このプログラム全体やその一部である「認知症高齢者への環境支援指針」は、厚生労働省による「認知症介護実践者研修」、「個室ユニット型施設職員研修」、「認定認知症看護師研修」や自治体における介護人材養成研修に採用され、全国へ広がりがつつある<sup>4,6)</sup>。

各地で取り組まれる環境を生かしたケアが、科学的根拠に基づく実践として継続と向上が図られるように、「施設環境づくり支援プログラムの継続と向上のための理論モデル」等<sup>7,8)</sup>の考え方の整理がプログラム評価法<sup>9,10)</sup>に基づき行われた。この理論モデルの考え方、実践に用いるツール、実践の組織等についてすでに詳細に述べているので<sup>8)</sup>、ここでは本論文に必要な骨子を取り上げる。

「施設環境づくり支援プログラムの継続と向上のための理論モデル」<sup>8)</sup>は、プログラムの実施に関する「資源」や「活動」の内容、そこから生じる「実践結果」や「成果」を体系的にチャートで示したものである。「資源」には、「施設環境づくり支援プログラム」や環境づくりの中核となる現場職員や高齢者など参加者が含まれる。「活動」は現場職員を中心とした施設環境づくり実践とその自己評価、外部の実践者によるピア評価から構成される。「活動」には、施設環境づくりを実践する職員への施設環境づくり研修も含まれる。「実践結果」として、環境づくりプロセスの実施状況と環境づくりの内容を位置付けている。「環境づくりの成果」は、「サービス成果」と「利用者成果」の側面から捉え、「サービス成果」は「認知症高齢者への環境支援指針」に基づくケア環境の改善、「利用者成果」は認知症高齢者と家族の行動変容で捉える。最終的には、高齢者及び家族の生活の質や満足の向上を目指したモデルである。

### 2. 研究の目的

「施設環境づくり支援プログラムの継続と向上のための理論モデル」<sup>8)</sup>を用いて数年にわたり環境づくり実践を行っている施設の中から、グッドプラクティス事例を取り上げて、この理論モデルの適用の有用性について以下の点を検討することが本研究の目的である。

- ①この理論モデルの適用により、6ステップから構成される施設環境づくりで実際に取り組まれた環境要素が明らかにされ、環境づくりプロセスの可視化が図られたか。
- ②実施された個々の環境づくりの目的や取り上げられた手法の内容が整理され、実施結果の明確化が図られたか。
- ③サービス成果として、施設環境が認知症高齢者に支援的な環境へと向上したことが捉えら

れたか。

④利用者成果として、認知症高齢者の行動の改善が捉えられたか。

⑤サービス成果と利用者成果の継続と向上が捉えられたか。

### 3. 用語の定義

#### (1) 認知症高齢者に配慮した施設環境づくり支援プログラム<sup>3)</sup>

施設環境は、建物や設備などの物理的環境、介護者の関わりなどの社会的環境、サービスや管理方針などの運営的環境から構成される。「施設環境づくり支援プログラム」は、環境の3要素を、個々の認知症高齢者に合わせて調整を行い、ライフスタイルや自立の維持を支援して、生活の質向上を目指す実践プログラムである。このプログラムは6ステップ（ステップ1：ケアと環境への気づきを高める、ステップ2：環境課題をとらえて環境づくりの目標を定める、ステップ3：環境づくりの計画を立てる、ステップ4：環境づくりを実施する、ステップ5：新しい環境を暮らしとケアに活かす、ステップ6：環境づくりを振り返る）から構成され、各ステップにはコミュニケーションや実践を助ける豊富なツールが用意されている。理論モデルでは、「施設環境づくり支援プログラム」は、「資源」に位置付けられる。

#### (2) 認知症高齢者への環境支援指針

Weisman らが米国で開発した Professional Environmental assessment Protocole<sup>11)</sup> を日本の実情に合わせて3回の改定を行ったものが「認知症高齢者への環境支援指針（以下 PEAP 日本版3と省略）」<sup>12)</sup> である。認知症高齢者のケアと環境に重要な8次元（見当識への支援、機能的な能力への支援、環境における刺激の質と調整、安全と安心への支援、生活の継続性への支援、自己選択への支援、プライバシーの確保、ふれあいの促進）から構成され、環境づくりの6ステップを通じて活用される。

## II. 研究の方法

### 1. 施設環境づくりの実施方法

#### (1) 対象とした社会福祉法人と施設

##### ①対象とした社会福祉法人における施設環境づくりの取り組み

都内 X 区にある X 社会福祉法人では、認知症ケア向上の一環に施設環境づくりを位置付け、2010 年から X 区介護研修機関で行われている施設環境づくり研修に毎年職員を送り、大学等の施設環境づくり専門家の支援を受けながら、管轄する5か所の特別養護老人ホームで「施設環境づくり支援プログラム」による実践を進めてきた。施設環境づくりの中心となる職員は、「施設環境づくりリーダー研修」や「施設環境づくり基礎研修」<sup>6)</sup> を受講して、施設内で他職員への伝達研修を実施している。リーダー研修は、「施設環境づくり支援プログラム」のステップ1～6の講義・演習と自施設での環境づくり実践を含む6回コースである。

2012 年から「施設環境づくり支援プログラムの継続と向上のための理論モデル」<sup>8)</sup> を採用し、5施設で施設環境づくりに取り組むと同時に、施設や在宅部門の職員から構成さ

れる「認知症ケア推進委員会」を法人内に設置し、施設環境づくりを法人全体で共有する仕組みを構築している。

## ②対象とした施設

X 社会福祉法人に属する 5 か所の特別養護老人ホームの 2012 年～2015 年の 4 年間の取り組みにおいて、実践数が最も多く、高いピア評価を得た A 特別養護老人ホーム（以下 A 施設と省略）をグッドプラクティス事例として取り上げた。A 施設は、1994 年に開設された定員 50 名の 2 階建ての従来型施設であり、認知症高齢者は各階に生活している。4 年間の平均要介護度は 4.4、認知症高齢者の割合は 93%である。ちなみに厚生労働省介護サービス施設・事業所調査では、介護老人福祉施設の要介護度の全国平均は 3.9（2012～2015 年）、「認知症高齢者の日常生活自立度判定基準」に基づく「ランクⅡ」以上の見守りや介護が必要な認知症高齢者の割合は 92.5%である（2013 年時点）。

## （2）施設環境づくりの実施方法

### ①施設環境づくりの実施手順

A 施設では、施設環境づくりの中心となる職員に「施設環境づくりリーダー研修」を受講させ、施設内で施設環境づくりに関する研修を全職員対象に実施した。

施設環境づくりは、「施設環境づくり支援プログラム」<sup>3)</sup>に示す 6 ステップに沿って、各種ツールを用いて、毎年 4 月から翌年の 3 月の 1 年を単位として進められた。

「認知症ケア推進委員会」に属する職員が、自施設における施設環境づくりのマネジメントを行った。同職員は法人全体の「認知症ケア推進委員会」に年 3 回出席して、前年度の施設環境づくりの成果の報告、新年度の施設環境づくり実践や評価の確認、自施設の経過報告を行った。環境づくりの実施には食事や入浴等各種委員会や居室担当が当たり、職員全員参加で進められた。「ステップ 6：環境づくりを振り返る」では、「環境づくり実践記録シート」に組み組みごとに環境づくりの課題、目的、取り組みの内容、PEAP に基づく環境づくり前後の評価等の記録が実践に携わった職員により作成された(図 1)。また「環境づくり行動チェックシート」を用いて、高齢者や家族の反応が記録された。「認知症ケア推進委員会」に属する職員が、施設全体の記録シートの確認を行った。

### ②ピア評価の方法

法人の「認知症ケア推進委員会」に属する他施設の職員は、年 3 回の報告を受けたのち、環境づくりが終了した 2 月に、A 施設の「環境づくり実践記録シート」と「環境づくり行動チェックシート」に目を通したうえで、A 施設を訪問して環境づくり実践事例の説明を受け、見学を行った。その上で「ピア評価シート」を用いて、施設環境づくりの内容について評価を実施し、意見交換を行った。



環境づくり実践記録シート NO. (1)    ○○年○月○日    記入者    ( 認知症ケア推進委員会 )				
1. 環境課題 (STEP1～2)	(場所)                      食堂入り口 新聞が乱雑に置かれている。どこにあるかわからない。自由に読めない。			
2. 暮らしのイメージ (STEP3)	(利用者の暮らし方シミュレーションシートのポイント) 誰でもが自由な時間に新聞を読むことができ、新聞を読む習慣が続けられる。			
3. 目標設定 (STEP3)	(暮らし方のイメージを実現するための環境支援の具体的な目標) 新聞コーナーが定着して、どこにあるかわかり、誰もが自由な時間に新聞を読むことができる。			
4. 環境づくりの内容 (STEP4～5)  (物理的環境のみでなく、ケアや運営での工夫を説明。環境づくり前後の写真も用意。)	<p>● 物理的環境支援 新聞入れを手作りして、高齢者が取り出しやすい位置に設置する。</p> <p>● ケア的環境支援・運営的環境支援 高齢者に新聞入れを周知する。職員にも新聞入れを活用するように周知した。</p> <div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;">  <div style="margin: 0 10px; font-size: 2em;">➡</div>  </div>			
5. PEAP 評価 (STEP6)		事前	事後	環境づくり後にどのように変わったかを記す
○: 支援されている ×: 支援されていない ?: どちらともいえない 関連しない次元は空けておく。	1. 見当識	×	○	高齢者の目線に合っているので、分かりやすい
	2. 機能的能力	×	○	新聞を読む時間が増え、離床時間が増えた
	3. 刺激の質と調整	×	○	雑然とした場所が整理されきれいになった
	4. 安全と安心	×	○	ものが整理され、安全になった
	5. 生活の継続性	×	○	食後に新聞を読む習慣を継続できる
	6. 自己選択	×	○	新聞、チラシともに入っているのを選んでみられる 新聞を読み過ごし方が選べる
	7. プライバシー			
	8. ふれ合いの促進	?	○	新聞記事を取り上げた話題が聞かれるようになった
6. 利用者の評価	「新聞はここに入れるのよ」「すごいいいアイディア」といった反応が聞かれる			
7. 今後の課題	現在の仮設的な新聞入れが好評なので、見栄えの良いものに変える。			

図1 施設環境づくり支援プログラムのSTEP1～6に基づく環境づくり実践記録シートの記入事例

## 2. 施設環境づくりに用いるシートとその整理の方法

施設環境づくりに用いるシートとその整理方法は、先行研究に詳細に記されており、本論文でもそれに準じる<sup>8)</sup>。以下に、理論モデルの流れに沿って概略を述べる。

### (1) 環境づくりの実施結果

#### ①施設環境づくり効果的支援要素チェックシート

施設環境づくりのプロセスを把握するために用いられるシートで、B領域：プログラムを円滑に実施するための仕組み作り、C領域：環境づくりの課題と目標の共有、D領域：環境づくりの計画と実施、E領域：環境づくりの評価と課題の明確化、F領域：環境づくりの継続・維持のための体勢に関わる10次元合計78項目から構成される（次元の詳細は表1参照）。環境づくり実施後に各項目の実施の有無が施設ごとに記録され、次元ごとの実施率が求められる。分かりやすく示すため、実施率を基にレーザチャートを作成する。

#### ②施設環境づくりの内容の把握

環境づくりの実施内容は、「環境づくり実践記録シート」の記録に基づき、以下の内容に整理される。

- ・施設環境づくりの場所：浴室・トイレ・洗面、食堂・リビング、居室、廊下・ホール、静養室、バルコニー・庭に整理される。
- ・施設環境づくりの目的の大分類：先行研究に準じて<sup>13)</sup>、環境づくりの目的の大分類を行った。「安全と安心が確保される」、「場所や時間などが分かりやすい」等9つの目的に分類される（項目の詳細は表3参照）。
- ・施設環境づくりの実施方法：採用された環境づくりの実施方法を、物理的対応（物理的工夫・物の購入・工事）、ケア的対応（個人に合わせた調整や職員への周知等）、運営的対応（会議の開催や運営面からの協力等）に分類をする。一つの環境づくりに、複数の方法が採用される場合がある。
- ・物理的対応に用いられた環境要素：物理的対応に用いられた環境要素は、構造（建物の壁や床等）、準構造（手すり等）、家具・福祉用具、小物（掲示物やインテリア小物等）、その他（色彩や照明等）に分類される。複数の環境要素が採用される場合もある。

### (2) 施設環境づくりの成果

#### ①サービス成果

「環境づくり実践記録シート」に記録される環境づくり前後のPEAP8次元の評価に基づき、環境づくりによるサービス成果が捉えられる。PEAPの各次元は、「支援されている○」「どちらともいえない?」「支持されていない×」で評価され、その前後の変化を「×や?→○を向上」「×→?をやや向上」「変化なし(○→○とその他→その他)」「○や?→×を低下」と分類する。PEAP8次元ごとに、実施事例の中で「×や?が○」となった向上率が求められる。

#### ②利用者成果

「環境づくり行動チェックシート」を用いて、環境づくりが認知症高齢者や家族に及ぼす影響について、大変そう思う～全く思わないの5段階で評価される。食堂など多数を対



象とした環境づくりでは、個々を評価するのではなく対象者を全体として捉えて評価を行う。認知症高齢者に対する評価の項目は先行研究の因子分析に基づき<sup>14)</sup>、「役割が増えた」等の社会的活動に関する項目、「落ち着いて過ごすようになった」等の自律的生活に関わる項目、「居室にその人らしさが感じられるようになった」等のパーソナルスペースへの配慮に関わる項目の合計 11 項目である（項目の詳細は表 7 参照）。家族の行動評価は、利用者と過ごしやすくなる等の 3 項目である（項目の詳細は表 8 参照）。集計は、項目ごとに「大変そう思う」と「まあそう思う」を加えた割合で示す。

### （３）ピア評価

ピア評価シートは、「環境づくりに多くの職員が参加して進められた」等の環境づくりのプロセスを評価する項目と「環境づくりがケアに活かされている」等のアウトカムに関する項目合計 8 項目から構成され（項目の詳細は表 9 参照）、大変そう思う～全くそう思わないの 5 段階で評価される。集計では、「大変そう思う」と「まあそう思う」と答えた割合が求められる。また、ピア評価シートの自由記述欄には、環境づくりについて良いと思った点や課題などが記録される。

## ３．研究倫理

A 施設の施設長と研究者は、環境づくりの目的、成果の公表、対象者に不利になった場合の速やかな中止など研究倫理への配慮について高齢者や家族、関係する職員に文書を用いて説明して了解を得た。研究者は分析や学術発表に際して、個人のプライバシー保護など研究倫理を遵守することを文書で説明して、法人及び A 施設の施設長の了解を得た。

## Ⅲ．結果

### １．施設環境づくりの実施結果

#### （１）施設環境づくり効果的支援要素の各次元の実施状況

個々の次元の実施状況の特徴は以下のようなものである（表 1）。「B-1 プログラムの円滑な実践」次元の 4 年間の平均実施率は 80.6%であり、個々の項目をみると一般職員の参加や環境づくりの各種会議が着実に行われたが、専門家との打ち合わせに関する項目の実施率は低い年が見られた。これは、施設の職員が自立をして、専門家の支援が必須でなくなったためといえる。「B-2 環境づくりの情報の共有と参加」次元の 4 年間の平均実施率は 90.9%であり、職員・高齢者・家族との情報の共有や参加に着実に取り組まれ、4 年間を通じて高い実施率となった。「C-1 環境づくりの理念の共有」次元の平均実施率は 83.3%であり、隔年に「PEAP 日本版 3」の職員勉強会が開催され理念の共有が図られた。「C-2 環境づくりの課題の把握と共有」の次元は、施設の課題を写真に撮りキャプションを付加するキャプション評価法の活用に関わる項目から構成され、職員、高齢者や家族の参加や課題の共有に力が入れられ、毎年 100%の実施率であった。「C-3 環境づくりの目標設定」次元の平均実施率は 85.0%であり、キャプション評価に基づく目標設定がなされた。「D-1 環境づくりの計画策定」が 65.6%、「D-2 環境づくりの実施」が 75.0%と値がやや低いのは、用意されている各種シートを使用しなかったことによる。代わり

に、「環境づくり実践記録シート」などを工夫して活用した。「D-3 環境づくりの暮らしとケアへの活用」次元の平均実施率は 89.3%と高く、環境づくりを職員間で共有して、暮らしやケアプランに積極的に活用したことを反映した。「E-1 環境づくりの評価と課題の明確化」の次元では、職員による環境づくりの自己評価、高齢者・家族・第三者による評価、ピア評価の実施により、84.1%の高い実施率となった。「F-1 環境づくりの継続への取り組み」の次元では、環境づくりが事業計画やケアプランに位置付けられ、環境づくりに要する時間や経費の確保が行われ、平均実施率は 95.0%という高い値が維持された。

以上のような個々の次元の実施状況を踏まえて、施設環境づくり効果的支援要素の各次元の実施率の 4 年間の平均を見ると、「D-1 環境づくりの計画作成」と「D-2 環境づくりの実施」の次元を除き、80%を超える高い実施率が示され、効果的な環境づくりに必要とされる項目が着実に実施されたことが示された。

環境づくりのどの要素が実際に実施されたか外部から知ることは難しかったが、施設環境づくり効果的支援要素を用いて、その結果をレーザチャートに示すことにより、環境づくりプロセスの可視化が可能となった（図 2）。

表 1 施設環境づくり効果的支援要素の各次元の実施状況

		各次元の項目に対する実施率%				
施設環境づくり効果的支援要素の次元（項目数）		2012	2013	2014	2015	4年間の平均
B-1	プログラムの円滑な実践（9）	100.0	55.6	100.0	66.7	80.6
B-2	環境づくりの情報の共有と参加（11）	100.0	90.9	100.0	72.7	90.9
C-1	環境づくりの理念の共有（3）	100.0	66.7	100.0	66.7	83.3
C-2	環境づくりの課題の把握と共有（9）	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
C-3	環境づくりの目標設定（5）	100.0	100.0	80.0	60.0	85.0
D-1	環境づくりの計画作成（8）	100.0	37.5	75.0	50.0	65.6
D-2	環境づくりの実施（5）	100.0	40.0	80.0	80.0	75.0
D-3	環境づくりの暮らしとケアへの活用（7）	100.0	71.4	100.0	85.7	89.3
E-1	環境づくりの評価と課題の明確化（11）	100.0	63.6	100.0	72.7	84.1
F-1	環境づくりの継続への取り組み（10）	100.0	90.0	100.0	90.0	95.0

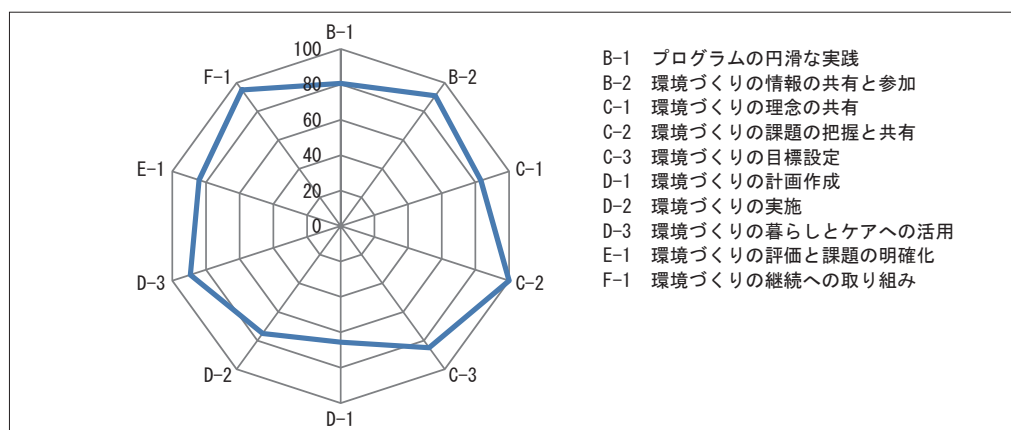


図 2 施設環境づくり効果的支援要素の各次元の実施率（4 年間の平均）



## (2) 施設環境づくりの内容

### ①施設環境づくりの実施件数と実施場所

一つの目的で行われた環境づくり実践ごとに施設環境づくり実践シートに記録して、1件と数えた。2012年～2015年間に、合計78件の実践が行われた(表2)。

環境づくりの実施場所について、各年の上位1～2位に印を付けた(表2)。4年間を通して実施率が高い場所は、食堂(リビング兼用)24.4%、居室21.8%であった。高齢者が多くの時間を過ごす食堂(リビング兼用)は、2013～2015年の3年間を通じて最も取り上げられた。施設内の各所で環境づくりが実施されたが、ベランダ・庭は利用者が重度化して本人による活用が難しくなったことやボランティアにより取り組まれているので、この環境づくり実践には取り上げられなかった。

表2 施設環境づくりの実施場所の状況

		各年の実施件数に対する割合%(実施件数)				
		2012	2013	2014	2015	合 計
浴室・トイレ・洗面	浴 室	13.6 (3)	16.7 (4)	8.0 (2)	0.0 (0)	11.5 (9)
	トイ レ	② 18.2 (4)	① 20.8 (5)	8.0 (2)	0.0 (0)	14.1 (11)
	洗 面	13.6 (3)	12.5 (3)	8.0 (2)	14.3 (1)	11.5 (9)
食堂(リビング兼用)		13.6 (3)	① 20.8 (5)	② 28.0 (7)	① 57.1 (4)	① 24.4 (19)
居室		13.6 (3)	12.5 (3)	① 40.0 (10)	14.3 (1)	② 21.8 (17)
廊下・ホール		① 22.7 (5)	12.5 (3)	8.0 (2)	14.3 (1)	14.1 (11)
静養室		4.5 (1)	4.2 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	2.6 (2)
ベランダ・庭		0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
合計(各年の実施件数)		100.0 (22)	100.0 (24)	100.0 (25)	100.0 (7)	100.0 (78)

注) 各年の実施率1位に①、2位に②の印をした。

### ②施設環境づくりの目的の大分類

施設環境づくりの目的の大分類について、年ごとに1位～3位に印を付けた(表3)。4年間を通じて、「自分の力を生かすことができる(24.4%)」、「自分で選択できる(17.9%)」、「場所や時間などが分かりやすい(12.8%)」、「入浴や排泄が快適にできる(12.8%)」が上位となり、とくに「自分の力を生かすことができる」と「自分で選択できる」という積極的な目的は、ほぼ4年間を通じて上位であった。一般的に認知症高齢者では注目される「安全と安心が確保される(5.1%)」や「落ち着いて過ごすことができる(3.8%)」を直接の目的とした取り組みは、わずかであった。この点は、認知症高齢者の不安や落ち着かない行動の背景には、その人にふさわしいケアや環境が不足しているためであるという法人や施設の考え方による。

表3 施設環境づくりの目的の大分類

各年の実施件数に対する割合% (実施件数)					
施設環境づくりの大分類	2012	2013	2014	2015	合 計
安全と安心が確保される	0.0 (0)	8.3 (2)	4.0 (1)	14.3 (1)	5.1 (4)
場所や時間などが分かりやすい	③ 18.2 (4)	0.0 (0)	① 24.0 (6)	0.0 (0)	③ 12.8(10)
自分の力を生かすことができる	① 27.3 (6)	① 25.0 (6)	① 24.0 (6)	③ 14.3 (1)	① 24.4(19)
自分で選択できる	18.2 (4)	② 16.7 (4)	③ 20.0 (5)	③ 14.3 (1)	② 17.9(14)
プライバシーに配慮される	9.1 (2)	12.5 (3)	4.0 (1)	0.0 (0)	7.7 (6)
社会的交流に配慮される	0.0 (0)	4.2 (1)	0.0 (0)	① 28.6 (2)	3.8 (3)
周囲から良い刺激を受ける	0.0 (0)	8.3 (2)	③ 20.0 (5)	① 28.6 (2)	11.5 (9)
落ち着いて過ごすことができる	4.5 (1)	8.3 (2)	0.0 (0)	0.0 (0)	3.8 (3)
入浴や排泄が快適にできる	① 22.7 (5)	② 16.7 (4)	4.0 (1)	0.0 (0)	③ 12.8(10)
合計 (各年の実施件数)	100.0(22)	100.0(24)	100.0(25)	100.1 (7)	99.8(78)

注) 各年の実施率1位に①～3位に③の印をした。

### ③施設環境づくりの実施方法

環境づくりの目的を実施する物理的対応の中で、経費がかかる購入や大規模な工事ではなく、物理的工夫が4年間を通じてほぼ100%採用された(表4)。ケアの対応の採用は、初年度は63.6%であったが、徐々に向上して2015年には100%となった。運営的対応は、2015年には28.6%であったが、4年間の平均は9.0%と少なかった。施設環境づくりの4年間の合計実施率は206.4%であり、物理的工夫とケアの対応がセットで提供されたことが示された。

表4 施設環境づくりの実施方法

各年の実施件数に対する割合% (実施件数)						
		2012	2013	2014	2015	合 計
対物 応理 的	物理的工夫	① 100.0(22)	① 95.8(23)	① 100.0(25)	① 100.0 (7)	① 98.7(77)
	購入	9.1 (2)	16.7 (4)	12.0 (3)	0.0 (0)	11.5 (9)
	工事	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
ケア的対応		② 63.6(14)	① 95.8(23)	② 96.0(24)	① 100.0 (7)	② 87.2(68)
運営的対応		0.0 (0)	12.5 (3)	8.0 (2)	28.6 (2)	9.0 (7)
合計 (各年の実施件数)		172.7(22)	220.8(24)	216.0(25)	228.6 (7)	206.4(78)

注) 各年の実施率1位に①、2位に②の印をした。複数の実施方法が採用されることがあるので、各年の合計は100%を超える。

### ④物理的対応に用いられた環境要素

物理的対応のために用いられた環境要素は多い順に、4年間の平均でみると小物(79.1%)、福祉用具・家具(32.6%)、色彩や照明などから成るその他(17.4%)であり、構造や準構造はほとんど取り上げられなかった(表5)。4年間を通じて、小物の活用が1位であった。

表5 物理的対応に用いられた環境要素

各年の物理的対応件数に対する割合％（物理的対応件数）					
	2012	2013	2014	2015	合 計
構造	0.0 (0)	3.7 (1)	0.0 (0)	0.0 (0)	1.2 (1)
準構造	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
家具・福祉用具	② 29.1 (7)	② 48.1 (13)	② 25.0 (7)	② 14.3 (1)	② 32.6 (28)
小物	① 83.3 (20)	① 59.3 (16)	① 89.3 (25)	① 100.0 (7)	① 79.1 (68)
その他	8.3 (2)	18.5 (5)	14.3 (4)	57.1 (4)	17.4 (15)
合計（物理的対応件数）	120.7 (24)	129.6 (27)	128.6 (28)	171.4 (7)	130.3 (86)

注）各年の実施率1位に①、2位に②の印をした。複数の実施方法が採用されることがあるので、各年の合計は100%を超える。

## 2. 施設環境づくりの成果

### (1) サービス成果

「環境づくり実践記録シート」に記録される環境づくりの前後のPEAP8次元の評価に基づき、向上率を表6の合計1欄に示した。合計1欄では、「見当識への支援（94.2%）」、「機能的な能力への支援（88.7%）」、「環境における刺激と質の調整（86.3%）」、「安全と安心への配慮（87.5%）」、「プライバシーの確保（81.5%）」で、4年間を通じてほぼ80%以上の高い向上率が得られた。それに対して、「生活の継続性」の次元では4年間の平均は87.7%であったが、2015年の向上率は50.0%にとどまった。また、「自己選択への支援（71.4%）」や「ふれ合いの促進（69.0%）」はやや低い向上率にとどまった。

施設環境づくりが続けられると、すでに支援的環境が実現しており、それが継続する事例も見られる。このような、すでに配慮がされているので環境づくりでは変化なし（○→○）の数値を加えた値を、合計2の欄に示した。これによると、「生活の継続性への支援（93.9%）」、「自己選択への支援（83.3%）」や「ふれ合いの促進（88.0%）」も高い数値が示された。

以上のように、理論モデルに基づき整理することにより、認知症高齢者を取り巻く環境が大きく向上して、それは4年間維持したことが示された。

表6 認知症高齢者への環境支援指針 PEAP 日本版3による効果（各次元の向上率）

各次元の取り組み件数に対する向上数の割合％（向上数 / 各次元の取り組み件数）						
PEAPの次元	2012	2013	2014	2015	合計1	合計2
見当識への支援	93.3(14/15)	83.3(10/12)	100.0(18/18)	100.0(7/7)	94.2(49/52)	96.1
機能的な能力への支援	81.3(13/16)	85.7(12/14)	94.1(16/17)	100.0(6/6)	88.7(47/53)	96.2
環境における刺激の質と調整	93.3(14/15)	92.9(13/14)	76.5(13/17)	80.0(4/5)	86.3(44/51)	90.2
安全と安心への配慮	82.4(14/17)	94.7(18/19)	82.4(14/17)	100.0(3/3)	87.5(49/56)	92.9
生活の継続性への支援	80.0(16/19)	100.0(22/22)	89.5(17/19)	50.0(2/4)	87.7(57/64)	93.9
自己選択への支援	66.7 (8/12)	90.9(10/11)	60.0 (9/15)	75.0(3/4)	71.4(30/42)	83.3
プライバシーの確保	80.0 (8/10)	80.0 (8/10)	85.7 (6/7)	0.0(0/0)	81.5(22/27)	88.9
ふれあいの促進	66.7 (8/12)	60.0 (6/10)	85.7(12/14)	50.0(3/6)	69.0(29/42)	88.0

注）合計1は×や?→○に向上、合計2にはこの数値に事前から配慮されているので変化なし○→○を加えた値。

## (2) 利用者成果

認知症高齢者の行動評価チェックリストで、行動の向上率が高い項目3つに印をした(表7)。4年間の平均では、「身の回りの動作でできることが増えた(56.4%)」、「落ち着いて過ごすようになった(52.6%)」、「積極的に声を出すようになった(39.7%)」が上位にあり、そのほかの項目にも幅広い効果がみられた。とくに、「身の回りの動作でできることが増えた」は、4年間を通じて高い効果が示された。

家族の行動評価では、「利用者と過ごしやすくなる(35.9%)」や「職員との距離が縮まる(32.1%)」が上げられた(表8)。すでに、家族とは良い関係を構築していたが、環境づくりにより良い効果が増加した。

表7 認知症高齢者の行動評価(向上率)

各年の実施件数に対する「そう思う+まあそう思う」の割合%(実施件数)

行動チェック項目		2012(22)	2013(24)	2014(25)	2015(7)	合 計(78)
1	アクティビティへの参加が増えた	13.6 (3)	4.2 (1)	8.0 (2)	0.0 (0)	7.7 (6)
	なじみの関係が増えた	② 50.0(11)	20.8 (5)	8.0 (2)	28.6 (2)	25.6(20)
	身の回りの動作で、できることが増えた	① 59.1(13)	② 62.5(15)	③ 44.0(11)	① 71.4 (5)	① 56.4(44)
	役割が増えた	22.7 (5)	12.5 (3)	8.0 (2)	② 57.1 (4)	17.9(14)
2	明るく元気になった	27.3 (6)	37.5 (9)	② 48.0(12)	28.6 (2)	37.2(29)
	積極的に声を出すようになった	22.7 (5)	37.5 (9)	① 52.0(13)	② 57.1 (4)	③ 39.7(31)
	落ち着いて過ごすようになった	45.5(10)	① 75.0(18)	③ 44.0(11)	28.6 (2)	② 52.6(41)
	居場所を選択して過ごせるようになった	40.9 (9)	③ 41.7(10)	24.0 (6)	0.0 (0)	32.1(25)
3	トイレまたは部屋の場所が分かるようになった	9.1 (2)	29.2 (7)	20.0 (5)	0.0 (0)	17.9(14)
	居室にその人らしさが感じられるようになった	9.1 (2)	20.8 (5)	32.0 (8)	28.6 (2)	21.8(17)
	利用者のプライバシーが守られるようになった	② 50.0(11)	25.0 (6)	16.0 (4)	0.0 (0)	26.9(21)

注) 因子分析に基づき、1 社会的活動、2 自律的な生活、3 パーソナルスペースへの配慮に分けて表示。

各年の実施率1位に①～3位に③の印をした。

表8 家族の行動評価(向上率)

各年の実施件数に対する「そう思う+まあそう思う」の%(実施件数)

	2012(22)	2013(24)	2014(25)	2015 (7)	合計(78)
家族の訪問が増える	18.2 (4)	12.5 (3)	4.0 (1)	0.0 (0)	10.3 (8)
利用者と過ごしやすくなる	① 27.3 (6)	① 45.8(11)	① 40.0(10)	① 14.3 (1)	① 35.9(28)
職員との距離が縮まる	① 27.3 (6)	② 33.3 (8)	② 32.0 (8)	② 42.9 (3)	② 32.1(25)

注) 各年の実施率1位に①、2位に②の印をした。

### 3. ピア評価

A 施設のピア評価には、4 年間で延べ 38 名の他施設の介護職員、相談員、看護職員、在宅部門の職員、法人管理部門の職員や環境支援専門家が参加した。環境づくりのプロセスを評価する「環境づくりに高齢者や家族の希望を反映して進められた」等の項目、または環境づくりのアウトカムを評価する「認知症高齢者の暮らしや行動に良い影響がみられる」等の合計 8 項目に対して、ほぼ 100%「そう思う」という評価が得られた（表 9）。

自由記述では、「利用者の立場になって捉え、考えられていることが伝わる」、「お客様の目線で環境づくりがなされている」など、そこで生活する高齢者を主体とした環境づくりやケアが行われていること、また職員全体で取り組んでいく体制が整っていることが高く評価された<sup>15)</sup>。

表 9 施設環境づくりのピア評価

各年のピア評価に占める「そう思う＋まあそう思う」の割合％（ピア評価者数）

ピア評価の項目		2012(8)	2013(10)	2014(9)	2015(11)	合計(38)
1	環境づくりの目標を実現するための適切な環境づくりになっている	100.0(8)	100.0(10)	100.0(9)	100.0(11)	100.0(38)
	環境づくりの目標や暮らしのイメージが明確になっている	100.0(8)	100.0(10)	100.0(9)	100.0(11)	100.0(38)
	環境づくりのプロセスを踏まえた取り組みがされた	100.0(8)	100.0(10)	100.0(9)	100.0(11)	100.0(38)
	環境づくりに多くの職員が参加して進められた	100.0(8)	100.0(10)	100.0(9)	100.0(11)	100.0(38)
	環境づくりに高齢者や家族の希望を反映して進められた	-	90.0 (9)	100.0(9)	100.0(11)	96.7(29)
2	環境づくりによって PEAP の次元に良い影響がみられる	100.0(8)	100.0(10)	100.0(9)	100.0(11)	100.0(38)
	環境づくりがケアに活かされている	100.0(8)	100.0(10)	100.0(9)	100.0(11)	100.0(38)
	環境づくりによって認知症高齢者の暮らしや行動に良い影響がみられる	100.0(8)	100.0(10)	100.0(9)	100.0(11)	100.0(38)

注) ピア評価項目の 1 は環境づくりのプロセスの評価、2 はアウトカム評価の項目。

「環境づくりに高齢者や家族の希望を反映して進められた」は、2013 から用いられた。

## IV. 考察

### 1. 施設環境づくりのプロセスの評価と可視化

施設環境づくり効果的支援要素チェックリストを用いることにより、A 施設では、とくに各種職員・高齢者・家族の参加と情報の共有、暮らしやケアへの環境づくりの活用、環境づくり成果の自己評価・第 3 者評価・ピア評価の実施、人・経費・時間などの環境づくりの実施体制の確立などに力点が置かれながら、次元全体について着実に取り組み、高い実施率を 4 年間にわたり維持したことが把握できた。これまで環境づくりのプロセスを外部から十分に把握することが出来なかったが、理論モデルに基づき整理することにより可視化がなされた。

今後、施設環境づくり効果的支援要素チェックリストを、環境づくり前の計画と実施後の実施状況の把握に使用することにより、施設環境づくりのプロセスの工程管理や標準化に寄与で

きる。

## 2. 施設環境づくり実施結果の明確化

施設環境づくりは6ステップから構成される「施設環境づくり支援プログラム」を用いて、施設環境づくり研修を受けた職員により、高齢者のニーズと実践者の気づきに基づく多様な取り組みが行われる。この研究では、環境づくりの実施場所、環境づくりの目的、実施方法を一定の基準で整理を行った。環境づくりの目的として、認知症の障害により発生する問題に焦点を当てるのではなく、「自分の力を生かすことができる」「自分で選択できる」といった個々のニーズに基づく環境づくりがなされたことが捉えられた。

施設環境づくりの手法は、小物や家具・福祉用具を用いる物理的工夫が中心であり、それがケア的対応とセットで実施されたことが把握された。

## 3. 施設環境づくりの成果の把握とその維持・向上

施設環境づくりの成果は、PEAP 日本版 3 にもとづく認知症高齢者への支援的環境の向上と環境づくりによる認知症高齢者と家族の行動変容により把握された。PEAP の 6 次元において 80～90%を超える高い向上率が実現した。今回の環境づくりにより環境支援がなされ向上した実践に、すでに環境支援がなされている実践を加えると、8 次元すべてで 9 割前後の高い環境支援状況であった。4 年間にわたり、きわめて高い環境支援が維持されていることが把握された。

認知症高齢者の行動変容については、「身の回りの動作でできることが増えた」「落ち着いて過ごすようになった」「積極的に声を出すようになった」の項目について、継続的に高い成果が捉えられた。身の回りの動作の自立は、環境づくりの目的として第 1 位に挙げられた「自分の力を生かす」を反映したと言える。環境づくりの目的として、「落ち着いて過ごすことができる」への取り組みはわずかであったが、「自分の力を生かす」や「自分で選択できる」等の個々のニーズに合った取り組みが、行動の落ち着きをもたらしたと考えられる。

今日の認知症ケアにおいて、BPSD（認知症の行動・心理症状）への対応は研究や実践上の大きな課題であり多様なアプローチがみられる。個々の認知症高齢者のニーズに基づき、物理的環境とケア的環境の両側面から行われる環境づくりは、認知症高齢者の積極的な力を引き出すことにより、行動・心理症状の改善に大きな可能性をもたらすアプローチであることが示唆された。

## 4. 自己評価とピア評価の意義

介護分野では第 3 者評価などサービス評価が取り入れられるようになってきたが、現場の職員が自らの実践を評価する機会はまだ少ない。この理論モデルでは、環境づくり実践記録シートと認知症高齢者の行動評価シートにより、現場職員の負担が少ない形で、自己評価が可能な体制を構築している。実践者自身による自己評価は、環境づくりの継続と向上の基盤として重要である。



他施設職員に環境支援専門家も加わり、ピア評価がなされた。ピア評価では環境づくりのプロセスやアウトカムについて十分な成果が得られたとしてほぼ100%の高い評価が得られた。このことは、A施設における着実な環境づくりプロセスの実施と充実したサービス成果・利用者成果との関連を示唆している。

高齢者分野ではピア評価という言葉はあまり見られないが、類似した意味で「施設間の相互評価」が用いられ、ユニットケアや認知症ケア技術の向上に有効とする報告がみられる<sup>16-17)</sup>。自己評価とピア評価を取り入れて、環境づくりの体制を構築することは、実践施設の職員と評価に参加した他施設職員の両者にとり、貴重な刺激と学びの機会となり、それが環境づくりの仕組みを維持する上で有効となるであろう。

## 5. 今後に向けて

施設環境づくりは、認知症高齢者の望むライフスタイルや自立の力に焦点をあて、物理的環境とケア的環境から支援することにより、よりよい行動や生活の満足度をもたらす積極的な手法であり、その結果として行動・心理症状の軽減にも寄与すると考えられる。このような生活の質に広くアプローチできる手法として、今後とも発展が望まれる。

また、多様な生活歴や症状を持つ個々の認知症高齢者のニーズに対応できるように、個別ケアに立った取り組みも充実させる必要がある。

今回はグッドプラクティス事例を取り上げて、この理論モデルの実践への適用の有用性を中心に検討を行った。今後は、多くの施設を取り上げ、統計的な実証の元にさらなる検討が求められる。

## 文献

---

- 1) Cohen,U. and Weisman,G.D. (1991) Holding on to Home—Designing environments for People with Dementia.The Johns Hopkins University Press. (岡田威海監訳・浜崎裕子訳 (1995) 老人性痴呆症のための環境デザイン—症状緩和と介護をたすける生活空間づくりの指針と手法. 彰国社, pp16-38.)
- 2) 赤木徹也, 鰐坂誠之 (2013) わが国における認知症高齢者の住環境に関する書誌学的研究—研究知見に基づく環境アセスメントと環境デザインへの示唆. 日本認知症ケア学会誌第12巻第2号, pp340-353.
- 3) 児玉桂子, 古賀誉章, 沼田恭子, ほか (2010) PEAP にもとづく認知症ケアのための施設環境づくり実践マニュアル. 中央法規, pp1-147.
- 4) 児玉桂子, 古賀誉章, 沼田恭子, ほか (2011) 「認知症高齢者に配慮した施設環境づくり支援プログラム」の全国レベルでの普及を目的とした実践研究. 日本社会事業大学社会事業研究所紀要第57, pp167-177.
- 5) 児玉桂子, 古賀誉章, 沼田恭子, ほか (2012) 「認知症高齢者に配慮した施設環境づくり支援プログラム」の全国レベルでの普及を目的とした実践研究に基づく教材開発. 日本社会

事業大学社会事業研究所紀要第 58, pp127-143.

- 6) 児玉桂子, 古賀誉章, 沼田恭子, ほか (2013) 「認知症高齢者に配慮した施設環境づくり地域連続型研修」とその効果—ケア環境・研修参加者の意識・利用者の行動に及ぼす影響の評価. 日本社会事業大学社会事業研究所紀要第 59, pp151-166.
- 7) 廣瀬圭子, 児玉桂子, 大島千帆, ほか (2012) 「認知症高齢者に配慮した施設環境づくり支援プログラム」の効果的实施モデルの構築—プログラム評価法理論及び方法論の適用. 日本社会事業大学社会事業研究所紀要第 58, pp109-123.
- 8) 児玉桂子, 廣瀬圭子, 鈴木真智子, ほか (2016) 「認知症高齢者に配慮した施設環境づくり支援プログラム」の継続と向上のための仕組みの検討—実践者による自己評価とピア評価に基づく—. 日本社会事業大学研究紀要, 第 63, pp97-114.
- 9) Rossi,P.H., Lipsey,M.W. and Freeman,H.E. (2004) Evaluation: A systematic approach. Sage publications. (大島巖, 平岡公一, 森俊夫, ほか監訳 (2005) プログラム評価の理論と方法—システマティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド. 日本評論社, pp159-278.)
- 10) 安田節之, 渡辺直登 (2008) プログラム評価研究の方法. (山下晴彦編) 臨床心理学研究法 7. 第 1 版, 新曜社, pp40-52.
- 11) Weisman GD, Lawton MP, Sloane P, et al. (1996) The professional environmental assessment protocol. School of architecture, University of Wisconsin at Milwaukee.
- 12) 下垣光, 児玉桂子, 影山優子, ほか (2009) 環境支援指針の作成と活用上の課題. 児玉桂子, 足立啓, 下垣光, ほか (編). 認知症高齢者が安心できるケア環境づくり—実践に役立つ環境評価と整備手法. 彰国社, pp66-78.
- 13) 児玉桂子, 大島千帆, 古賀誉章, ほか (2014) 施設環境づくり実践記録シートに基づく環境づくり実践内容と効果に関する検討—認知症ケア技術としての環境支援の構築に向けて—. 第 15 回日本認知症ケア学会大会発表.
- 14) 鈴木真智子, 児玉桂子, 廣瀬圭子, ほか (2016) 「施設環境づくり効果的援助要素」の実施状況が認知症高齢者に及ぼす影響 (2) 利用者の行動変容に着目して. 日本介護福祉学会大会発表.
- 15) 児玉桂子, 廣瀬圭子, 古賀誉章, ほか (2014) 平成 25 年度文部科学省・科学研究費補助金基盤研究 (A) 「実践家参画型福祉プログラム評価の方法および教育法の開発とその有効性の検証」グループ分担報告書—施設環境づくり継続のための職員による相互評価システムの構築—「認知症に効果的な施設環境支援プログラムフォローアップ評価報告書」. 認知症ケアに効果的な施設環境支援プログラム班. pp38-47.
- 16) 大久保幸積, 船津みゆき, 行徳秀和, ほか (2015) ユニット型施設における相互評価のシステム化に関する研究. 日本認知症ケア学会誌第 14 巻第 2 号, pp473-484.
- 17) 鈴木みずえ, 桑野康一, 下山久之, ほか (2012) 地域における認知症ケアマッピング (DMC) を用いた施設間相互評価の効果と課題. 日本認知症ケア学会誌第 11 巻第 2 号, pp563 - 575.

注 1) 本論文は科学研究費補助金基盤研究 (A)「実践家参画型エンパワーメント評価を活用した有効な EBP 技術支援センターモデル構築」(15H01974)の一環である。

注 2) 本論文は、本学大島巖教授の推薦を受けたものである。

謝辞) 施設環境づくりを認知症ケア向上に向けた実践の一環に位置付け、長年にわたり研究にご協力いただいた X 社会福祉法人の皆様に深謝いたします。